

この瞬間、自分の症状は「れっきとした病氣」で、治療対象なんだという意識が生まれた。

そして、この「FD」に適用される薬が、つい最近、日本で生まれたらしい。世界初なんだとか。

病名がある。それに対応した薬もある。

まさに、「境界線が引かれた」感覚だ。

病氣というものの多くは、こうして生まれる。

昨今、テレビCMで「〇〇は病氣です」という宣言を耳にすることが多いが、これもその一種だと言えよう。

それは、もちろん一面では私たちを不安にさせるが、別の面では安心させる。何しろ、「〇〇病」という名づけによって、得体の知れないものの正体が明らかになった気がするわけだから。

いわば、病氣は「ある」ものではなく、「なる」ものなのだ。そして実は、これこそが「病は氣から」という言葉の本質なのではないだろうか。「氣」とは、名づけ

によって変動する心理を意味しているということだ。

この話は、他のどんな名づけにも当てはまる。

道端の草花を見て「この花、何て名前だろう？」と考えるのも、夜空の星を見上げて「あの星の名前、何だろう？」と考えるのも、同じことだ。

人は、名づけないと不安なのである。

名づけたとき、初めてそこに対象の存在が生じる。

名づけない世界は、狭い。だから、不安になる。

名づけることで、世界は広がる。

それが、人々の心を安らかに、豊かにする。

そういうわけだ。

〈問1〉部「病氣は『ある』ものではなく、『なる』

ものなのだ」とありますが、これはどういうことですか。最もふさわしいものを次のア〜エから選びなさい。

〈問2〉部「名づけることで世界は広がる。それが、人々の心を安らかに、豊かにする」とありますが、これを具体例で示したとき、ふさわしくないものを次のア〜ウから一つ選びなさい。

ア 病氣は、「氣のせい」か「れっきとした病氣」かというような区別がもたらあるものではなく、病名がつくことによって初めて固有の病氣として区別されるようになるものということ。

イ 病氣は、他の病氣と区別された状態で最初から存在するものではなく、もともと区別することのできない得体の知れない存在であるということ。

ウ 病氣は、「氣のせい」か「れっきとした病氣」かを区切るような境界線を引くことによって生まれるものではなく、個人個人の身体が持つ性質によって必然的に生まれるものであるということ。

エ 病氣は、名づけられる前であっても、その症状が治療対象であることを認識することができるものとして存在しているが、名づけられることによってよりいっそう他の病氣との境界線が明確になり、区別されるようになるものということ。

ア 社会的にまだ少数派である「育児に積極的な男性」が、「イクメン」と名づけられることによって存在感を増し、社会に認められるようになる。

イ 「嬉しい」「楽しい」「面白い」などといった言葉を総合し、「良い」と表現することによって、あらゆるプラスのできごとを表現できるようになり、安心する。

ウ 平安時代、室町時代、江戸時代などと名づけることで時代を相互に比較できるようになり、歴史に対する理解が深まり、それが豊かな未来を生む要因となる。